

ESSAY いたずら

倉元 信行

4

いたずら

“万華鏡”とはうまい名を付けたものである。千変万化する色と形の華やかさをうまく表わしているし“まんげきょう”という音の響きは一体何が出るのかという妖しげな香りを漂わせる。

新聞に載った東京の万華鏡専門店の記事に興味を覚え、出かけたのは3年ほど前のことである。実にさまざまな種類のものでびっくりした。何十万円もする天体望遠鏡みたいなものまである。

そのお店ではすべての品物を実際に手にとって覗けるようになっている。とっかえひっかえ夢中になって覗いてみた。

一番面白いと思って、結局買ってしまったのは、鏡を内蔵した筒の先に2枚の円盤を付け、自由に回転するこの2枚の重なりが多様な変化を創り出すものである。大ざっぱに言って、手元側の円盤で視野の中の模様が決まり、外側のほうで色が決まるが、その効果が混ざり合っていてとても面白い。

こんなものはいくら言葉で表現しても駄目だ。ローマングラスと一緒に、百聞は一見に如かずである。

持ち帰って子供たちに見

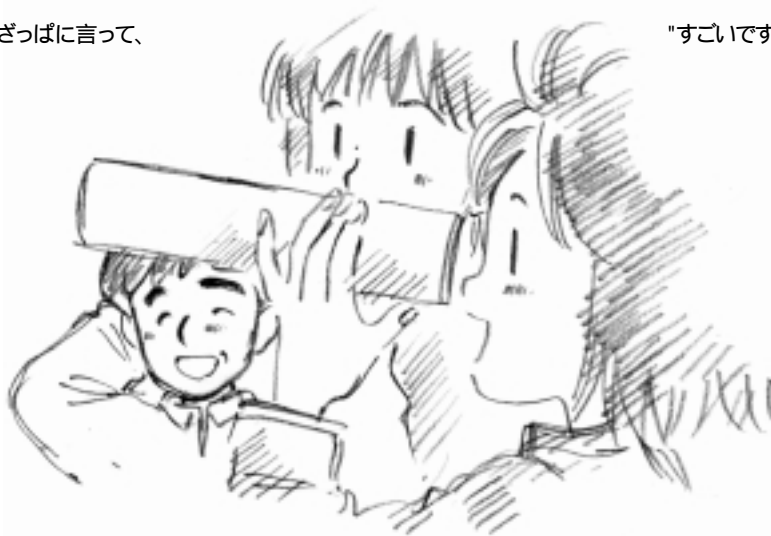
せると、ウァーきれい、とか、おもしろーいと、声を出して喜んでいる。それから、妻や子供を連れて何度かその店をのぞき、円盤の種類も少しずつ増えていった。

ある日、ちょっといたずらしてみようかと思った。万華鏡なら小学生の時、鏡とボール紙と色セロファンで作った経験もあるではないか。

色と形の原点になるこの円盤を自作してみることになった。

横浜の東急ハンズに行き、実物と同じ大きさの直径が8センチの透明なアクリルのリングと板、色の着いたアクリルのビーズ、色ガラス、それに思い付きで金と銀のネックレスを買ってきた。

どれも安いものである。



“すっごーい”

私だけでなく覗いたみんなが驚嘆の声を上げた。

ネックレスに色ビーズを通し、その所々を円盤に固定したものを手元側に、外側に色ガラスを張りつけた円盤を置いたのである。

回転につれ、鎖が微妙にゆれビーズと共に光り輝く。そのむこうにある色とりどりのガラスがそれに溶け合う。これこそ、まさに万華鏡の世界である。

日が射しているような戸外で見ると、ただただ、ため息である。店で見たどんなものよりきれいだ。

自作の一品を携えて万華鏡店を訪れた。晴れた日だったので私の勤めに応じてお店の人は表の道路に出て覗いてみた。

“すごいですねー”

“もうすぐこの近くに工房を開く予定ですが、そこで作ってみませんか”

丁重にお断りした。こんなものにまで足を突っ込んでいては身がいくつあっても足りない。私はただプロをびっくりさせてみたかっただけなのだから。

こんないたずらが大好きだ。